

指導行政のポイント

行政からみた“戦後教育史”

菱村 幸彦

このたび、教育開発研究所から『戦後教育はなぜ紛糾したのか』という図書（以下「本書」）を出版した。自分の本を紹介するのは、いささか気が引けるが、お許しをいただきたい。

紛争が絶えなかった戦後教育

本書の帯に「元文部官僚が書いた体験的战後教育史」というキャッチコピーが記してある。つまり、これは私の体験的な戦後教育史である。35年余に及ぶ文部省勤務のなかで、私自身が見聞き、体験した戦後教育の実相をエピソードを交えて綴った。

ふり返れば、戦後の教育界では紛争が絶えなかった。学習指導要領、教科書検定、道徳教育、勤務評定、全国学力調査（40年前の）、ストライキ、主任制、職員会議、国旗・国歌 こうして挙げていけばきりが無いほど、時々の教育施策をめぐる対立と抗争が起き、教育現場に混乱をもたらした。

では、なぜ戦後教育は紛糾したのか。本書では、終戦直後の教育改革から平成18年の教育基本法改正までの60年間の主なテーマを取り上げ、戦後教育がなぜ紛糾したのかを、教育行政の立場からできる限り実証的に解明することを試みた。

私は、戦後教育の紛糾の背景に3つの思想があったと考えている。第1は、占領軍がもたらしたアメリカのプラグマティズム。第2は、社会主義の実現を目指すマルキシズム。第3は、戦争の贖罪からくる反国家主義の思想。この3つの思想がない交ぜになって、戦後教育を特異なものにした。詳しくは、本書をご覧ください。簡単に要約すると、こうだ。

第1のアメリカのプラグマティズムは、戦後のカリキュラムに影響を与えた。戦後の学校教育は、デュイの教育思想の影響を受けて、体験主義を重視したカリキュラムでスタートした。しかし、体験主義カリキュラムは、基礎学力の低下を招く結果となり、独立後の見直しで系統主義に基づくカリキュラ

ムに転換した。これを進歩的教育学者は「逆コース」と批判し、日教組は「総抵抗」運動を展開した。道徳教育講習会の妨害や学テ反対闘争はこの延長線上にあった。

第2のマルキシズムは、教職員組合の活動に影響を及ぼした。日教組の倫理綱領に「搾取と貧乏と失業を伴う今日のような社会体制は根本から考え直さなければならない」と掲げられ、その綱領に則った教師の活動が偏向教育を招いた。その代表的な事例は、社会主義国家を賛美した夏休み帳を配付して問題となった山口県小・中学校日記事件である。家永裁判をはじめとする教科書検定への攻撃や全国に吹き荒れた学園紛争はマルキシズムと通底している。

戦後教育の歩みを検証

第3の反国家の思想は、「教え子を再び戦場に送らない」という反戦平和運動となり、「日の丸」「君が代」に対する拒否闘争となった。また、反国家の思想は、教育委員会や校長を権力の手先と非難攻撃する風潮を学校現場に醸成した。職員会議を学校運営の最高議決機関とする主張や勤評反対闘争、主任制反対闘争等も根は同じである。

しかし、本書は、教育紛争ばかりを取り上げているわけではない。イデオロギーが退潮した1980年代以降、先進諸国が共通して悩んだ教育課題（学力低下や校内暴力・いじめ等）への対応に苦心したこと、急激な社会の変化に対応するため、臨時教育審議会、教育改革国民会議、教育再生会議など官邸主導の教育改革が20年にわたって続いたこと、「ゆとり教育」批判と学力低下論争が教育行政に与えた意味などについても詳述し、戦後教育の流れを全体的に俯瞰している。

政権交代で教育政策のあり方が改めて問われているいま、本書によって戦後教育が歩んだ道を検証してみてほしい。

（ひしむら・ゆきひこ = (財)学習ソフトウェア情報研究所 理事長）

●最新刊 大好評発売中！ 教育行政からみた体験的战後教育史！ A5判/215頁/定価2,100円
『戦後教育はなぜ紛糾したのか』 菱村幸彦【著】